

# 小田原史談

第124号

発行所 小田原史談会  
小田原市南町2-3-21



## 自叙傳

壽昌寺住職  
同理事長 大井 諦玄  
荻窪保育園長

壽昌寺本堂建立に当り私地鎮祭の導師を相務めた絶句一詩あり。

壽昌山頭永放光。 壽昌山頭永く光を放ち  
無辺感応施無藏。 無辺の感応無藏を施す  
今茲ト地全祈福。 今茲に地をトし祈福を全うす  
広度群生与吉祥。 広く群生を度し吉祥を与う  
註無辺に到る処、どこでも、縦横無尽  
感応に感応同交、隻手の声  
無藏にかくれなき真理  
群生に衆生と同じ

雪花  
万仞岩上無源水。 万仞の岩上無源の水  
穿石拂雲湧沸来。 石を穿ち雲を拂う湧沸し来る  
散雪飛花縦乱乱。 散雪飛花縦ひ乱乱たるも  
一條白練絶塵埃。 一條の白練塵埃を絶す  
註乱れみだれ飛ぶさま  
白練に白いねり絹の如く雪の積った様

溪水瀑漲  
可知雲谷幽深处。 知る可し雲谷幽深の処  
更有灵松歴歳寒。 更有り灵松歴歳寒し  
藤枯樹倒山崩去。 藤は枯れ樹倒山崩れ去る  
溪水瀑漲石火流。 溪水瀑漲し石火流る

昭和四十六年六月五日県保育会長より表彰。

昭和四十六年従来の木造平屋を鉄筋コンクリートに改築すべく之を、運動場南側に索引し此処に保育を実施、昭和四十七年三月二十五日完成、鉄筋コンクリート四階建、延七七八、三一五㎡、定員九十名の認可を受け、落慶式挙行す、県福祉関係、小田原市長始め福祉関係職員、市各保育園長、保育園理事、保母、民生委員、壽昌寺理事、責任役員、園児父兄、親戚等二百余名来集盛大裡に円成す。

昭和四十七年十月二十五日県知事より表彰。

同年十二月十五日市長より永年荻窪長生会長勤務により表彰さる。

昭和四十八年一月二十日緋恩衣の特許を受くこれでの法衣を着れる。

同年三月二十六日曹洞宗管長より権大教師任命同年三月三十日薫恩衣特許さる、これで黄色の法衣を着れることになった。

昭和四十九年極楽寺住職守本道善遷化す師は私の甥(肉)に当る、私義務住職を曹洞宗管長より任命さる。昭和四十九年一月十一日荻窪保育園一二〇名定員の認可を受く、

同年一月二十六日県老人連合会長より表彰。

昭和五十年荻窪保育園定員一五〇名の認可を受く。

甲寅元旦

七十三年気益振。

迎春々々墨文親。 春を迎へ啼々たり墨文親しむ  
着衣喫飯任摩去。 着衣喫飯任摩に去る  
一撈一揆本然真。

七十三年気益振。

春を迎へ啼々たり墨文親しむ  
着衣喫飯任摩に去る  
一撈一揆本然真なり

註嘩々に広い心でゆったりして居るさま

任摩去にかくの如く茶を頂く時は茶三昧、飯を頂く時は飯三昧、他事は何も考へない。

又

対酒迎春又一年。 酒に對し春を迎う又一年  
半生寂寞奈徒然。 半生寂寞徒然をいかんせん  
為買設園越還曆。 買と為り園を設け還曆を越ゆ

壽昌山裡竹林鮮。 壽昌山裡竹林鮮かなり  
註賈にコと読めば商人の意、カと読めば物のあたひ、  
山裡に壽昌寺の景色、竹の林が鮮である様  
年末偶成

七十五年夢一場。 七十五年夢一場  
喫茶喫飯是禪床。 喫茶喫飯是れ禪床  
舌転風雷文字外。 舌は風雷を転じ文字の外  
人間万事路羊腸。 人間万事路羊腸

施餓鬼会  
碧漢無雲是奈雷。 碧漢雲無く是れ雷をいかんせん  
壽昌山堂打鼓来。 壽昌山堂鼓を打ち来る  
憐他倒苦三途鬼。 他の倒苦を憐む三途の鬼  
甘露門開法供堆。 甘露門開く法供うづたかし

註施餓鬼会は餓鬼に食を施す法会のこと、それに附会して先祖の供養を行ふ、施餓鬼には三つの説がある、その内の一つに焰口餓鬼(食べやうとする食物が火となつて食べられない鬼)阿難尊者(お釈迦様の弟子)に無数の餓鬼に食を施すことを乞うた阿難は師匠のお釈迦様の処にいつて、教を請うた、私は一器の食を設け「加持飲食陀羅尼」(曩莫薩嚩恒佉樂多囉嚩吉帝唵三婆羅三婆羅吁)を誦すれば、無量の飲食となる一切の餓鬼これによつて飽満し倒懸の苦を脱することが出来といわれた。

甘露門に涅槃への法門、説法であつて之を慈雨にたとへて甘露の法雨と云う。

碧漢に青空、一点の雲なきを云う。  
水亭観蜚

四囀柳岸泛舟過。 柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
鼓拙搗股發棹歌。 拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々螢光明又滅。 点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

柳岸を回囀し舟を泛べて過ぐ  
拙を鼓し股を搗ち棹歌を發す  
点々たる螢光明又滅

炎氣執処晩涼多 炎氣執の処も晩涼多し  
註回瞻前後左右をまわり見る、瞻はみる也  
鼓世世は舟をこぐかい、かいをたゞく也  
搗股搗は力、股をうつ也  
棹歌ふな歌

晩涼夜になると涼しさ多い

元豆

乾坤々々慶雲濃

乾坤々々として慶雲濃なり

偶響寿昌百八鐘

偶響く寿昌百八の鐘

課罷觴哦歛弗極

課罷觴哦す歛極らず

吾迎七十耐三冬

吾七十を迎ゆるも三冬に耐う

註乾坤天地世の中

皞々ひろくゆつたり明らかに落ちついている

百八鐘百八の煩悩を打にくだく除夜の鐘

觴哦酒筵を開き歌う

三冬冬の三ヶ月 初冬(十月) 仲冬(十一月) 季冬

(十二月) 陰曆

又

市井陌巷住無憂

市井陌巷住みて憂無く

仰上青天白雲流

上を仰げは青天白雲流る

平素莫非昧地

平素非莫く三昧地

世人不識真自由

世人識らず真の自由

註三昧地印度の言葉サマーテイの訳、三昧王三昧、食

三昧等つかわる

その仕事に専注し他の事は考へない

真自由何事にも纏われないことなき自由

偶吟

馬齒猶擢八十年

馬齒猶なまぐさし八十年

恁摩世縁無風塵

恁摩の世縁風塵無く

神通妙用南能旨

神通妙用南能の旨

生死涅槃是空頻

生死涅槃是れ空頻なり

註擢音はせん、擢肉、擢香

南能南方に教線を張った慧能、五祖弘忍の門下であ

る慧能と北宗禪を機用した神秀のことを「南能

頓宗、北宗漸宗と云う、慧能禪師はすぐれた禪

智識 神通神は神変不測、通は無礙自在、測ることの出来

ない神変不可思議 無礙自在な力用、神通に六  
種ある。(一)神境通、(二)宿命通、(三)漏尽通、(四)天  
眼通、(五)天耳通、(六)他心通  
神通妙用神変不可思議の働、何物にもとらわれない  
すぐれた働

於韓国購福祿寿像以賦

長頭短脛異形奇 長頭短脛異形奇なり

白髻余膝怒雷馳

白髻膝に余る怒雷も馳す

福祿更施高寿の徳

福祿更に施す高寿の徳

老松帶霞鶴声麗

老松霞を帯び鶴声うららかなり

註福祿寿の像は福と祿とを人に施す、福は蝠に通じ蝙蝠

を表す、中国ではこうもりを喜ぶならいがある。祿は

鹿に通ずる。故に寿老人に蝠と鹿を書き添えて福祿寿

とすることもある。福祿寿は短身(脛が短い)長頭多

髻(ほうのひげ)にして杖に經巻を結び鶴をとまなう

ている。以上の理で賦したがいかかかな。

教誨を請う。

以一為万物

一を以って萬物となす

有物先天地

物あり天地に先きだつ

形無元寂寥

形無く元寂寥

能為万象主

能く万象の主となり

逐四時不凋

四時を逐つて凋す

無一塵

一塵も無し

八十年來辛苦人

八十年來辛苦の人

迎春不換旧風煙

春を迎えて換へず旧風の煙

着衣喫飯恁摩去

着衣喫飯恁摩に去る

大地那有曾一塵

大地那ぞ曾て一塵有らや

註才三句仏祖の法衣をまとい御飯を頂くことは年々凡

々何も飾らず人に自由をしばらくことなく生活

して来た。恁摩去はこの様に行つて来た。

金婚賦

金婚ノ賦

撥草追牛八十年

草を撥き牛を追うこと八十年

孀吾一拍金婚研

孀と吾は一拍金婚研なり

知音何必勞唇舌

知音何ぞ必ずしも唇舌を勞せん

孫子相將共歡然

孫と子相將いて共に歡然

註第一句草を取り除き(煩惱を取り除く)牛をとらへ

孀妻なり  
一拍拍手の声、以心伝心を言う  
知音昔中国に琴の名人拍牙と言う人がいた。一度之  
を奏するや、友人の鍾子期之を聴きその意中を  
知った。子期死するや之を破り捨ててしまった  
子期死んだ後は吾が意中を知る者なし思ひ破り  
捨てた。

捨てた。

孫子子や孫三十名小涌園に余と妻を招き祝い楽しい

一夜を過し歡極はまった

昭和五十二年十月十六日全国保育協議会長より表彰

さる。

昭和五十三年三月九日寿昌寺庫裡新築に付き、曹洞宗

管長より表彰状と金欄絡子を賜う。

昭和五十四年四月二日四三、三三坪の本堂を建立同日

落慶式法要を挙行厳修、組合寺院第七教区有志寺院、担

信徒多数出席、盛大裡に円成。同日本寺総世寺より中興

の称号を贈らる。私の法名は左記の如し。

寿昌寺三十三世中興大道諦玄大和尚 真位

昭和五十四年九月二十七日日本堂新築により金毘封金欄

絡子を、曹洞宗管長より賜う。

昭和五十五年十月二十五日永平寺地方副監院を命ぜら

昭和五十六年五月十六日県民功労賞を神奈川県知事

より受く。パッチとゆりの鎌倉彫を賜う。

元旦偶吟

浮世閱八十年 浮世閱すること八十年

満面靈光本來圓 満面靈光本來圓なり

莫謂功成方得道 謂う莫れ功成りて方道を得たと

祖門更有罔喻禪 祖門更に有り罔喻の禪

註祖門曹洞宗々門の禪

罔喻無悟の禪、即ち悟つた後の修業。悟りも修業も

二にして不二を云う。

右の漢詩を元小田原高校教諭若原正武氏に贈りました

具の返信に。

次諦玄老師之詩韻

世路難八十年 世路難し八十年

辛酸嘗尽至盛圓 辛酸嘗め尽す至盛圓なり

功業不期成一日 功業一日に成すを期せず

— 師道更通岡諭禪。 師道更に通ず岡諭の禪

註短歌にも返歌あり詩にも同韻を踏んで賦する礼ある。此詩は第一句(起句)第二句(承句)第四句(結句)に私の韻と同じ韻を踏んで作詩されたもの。

我が禪宗では毎年遺偈を正月(毎年)に作って遺しているのが一般のやう。私も書いて居るが、なかなか死なない。少しは畜積しています。ここに書いて置きましょう。その前に偈とは何か簡単に記しましょう。

偈は印度語で偈陀で伽陀で意識すると偈頌略して頌と言ふ。詩と全く同じであるが、佛教の意が含まれているのを偈と云ひ、そうでないのを詩と言います。故に、偈頌は、詩句の形で、佛徳を讃嘆し、教理を述べたもので、四字・五字又は七字を一句とし多くは四句を一偈として居ります。遺偈は遺誡偈頌の略で、高僧碩徳が、入滅(死亡)に際して、後人のために遺す偈、そこには大悟の境界、または心境感想等が、辞世の語として書かれている。私の遺偈を左に書てみよう。

遺偈  
(一)搬柴運水。 柴を搬び水を運ぶ  
○十余年。 ○十余年  
我執法執。 我執法執  
未得脱焉。 未得脱せず  
註柴を搬び水を運ぶこと○十余年。我にとられ、法にとられて未だ解脱が出来なかつた。焉は置字。意を強める助辞

(二)臘尽寒窮。 臘尽寒窮り  
○十〇年。 ○十〇年  
山庵今夜。 山庵今夜  
見白雲心。 白雲の心を見る  
註年尽きは寒さも極限に達した今年○十〇歳。山の中のいおりで今夜、白い雲の心を見ることが出来た。涅槃に入るを得た。

(三)將仏就仏。 仏をもつて仏に就く  
○十〇年。 ○十〇年  
灯油残処。 灯油残るところ  
山僧照辺。 山僧ほとりを照す  
(四)落花流水太茫々。 落花流水太だ茫々

誰識眉毛何処去 誰か識る眉毛何れの処にか去る  
註花は落ち水の流太たひろびろして居る誰が私の眉の毛の落ちる処を識るであろう。

(五)將錯就錯八十年。 錯を將て錯に就く八十年  
吾永訣又何云焉。 吾永訣す又何おか云はん  
註訣は再び会う事のない最期のわかれ

(六)如愚如魯。 愚の如く魯の如し  
八十二年。 八十二年  
命尽永訣。 命尽き永訣す  
吾何語焉。 吾何おか語らん

(七)随縁趣感。 縁に随い感に趣く  
八十二年。 八十二年  
末後転身。 末後の転身  
日月風寒。 日月風寒し

(八)無為大道。 無為大道  
畢竟如何。 畢竟如何  
我学那津。 我那津を学び  
被那津呵。 那津に呵せらる

註佛教の大儀を学ばす一態どうしやうか。あそこを学びあそこで笑はれた。  
(九)釣月耕雲。 月を釣り雲を耕す  
八十余年。 八十余年  
命尽永訣。 命尽き永訣す  
吾何語焉。 吾れ何をか語らん

(十)八十二年。 八十二年  
右往左往。 右往左往  
臭皮袋矣。 臭皮袋  
堪何用哉。 何の甲にか堪えんや  
噴  
遷化処作摩生。 一化を遷す処作摩生  
寿昌月白雲清。 寿昌の月白く雲清し  
註臭皮袋とはこの臭い皮の袋でこの身のこと。  
作摩生は接尾語、作摩と同じ。どこだろうかの意支那の俗語。

# 千代廃寺古瓦は語る

内田盛雄

瓦の比較の関連性 その(二)  
(写真D・1・D・4参照)

多賀城Ⅱ山田寺Ⅱ四天王寺との類似瓦  
山田寺と云えば蘇我倉山田石川磨呂の建立した寺で最近蓮子窓が出土し法隆寺より半世紀も早く建てられたと云われている寺である。山田式の鎧瓦(D・1)の分布は東関東地方から西は兵庫、鳥取県下迄概して東に厚く西に薄い。

東関東と云えば陸奥の多賀城(D・2)のものは、山田寺のものと比較すると周縁が無文で種子が長細で四個であるなど多少の相違は認められるが、子葉を持つており、ほぼ同類であると云える。

山田寺式の類形は大坂四天王寺や、奈良・坂田寺、南滋賀広寺や、城田寺がある。同系に神奈川川崎の向影寺(D・3)や、千葉の竜角寺(D・4)のものが

ある。全体的にはすでに述べた様に東関東に色濃く残っているが、西には兵庫鳥取から九州福岡の塔の原寺に飛火して、小分布圏を構成している。その理由として、蘇我日向が太宰師に左遷され般若寺を造立したこと、関連付けられている。

こうしてみると山田寺式は蘇我氏との関係が深い様である。山田寺は蘇我氏の山田石川磨呂の造立で、舒明天皇十三年(六四一)に造寺が誓願され(六四三)に金堂建立なる。もともと完成したのは、七世紀半であるが、瓦を用意したのは飛鳥時代末と思われる。「山田寺」とも云われて、重弁蓮花文宇瓦が重弧文軒平瓦を伴って、現われたのである。すなわち軒丸瓦の花弁には初めて小弁が中房の外周から中程まで出ている。周縁には二本の重圏文が巻いている。簡単な文様である。何

故にこの様な、中央を遠く離れた陸奥に山田寺式の古瓦の存在があるのか、都から遠く離れていても陸奥と百済とは上代から関係があったのである。

初め天智天皇三年(六六四)に帰化した百済王禪広(善光)の孫の遠宝は、文武天皇四年(七〇〇)に常陸国(茨城県)の国守に任命された。甥の敬福はさらに北上して天平十五年(七四三年)に陸奥守に任命されている。以来一世紀に渡り、陸奥と百済王家系の人々とは濃い関係が続いた。もちろん茨城もそうであったろう。百済は文様を持った瓦があるのは、こうしたことからもうなずける。

日本の美術(8)国分寺編で、三輪嘉六氏は、次の様に述べている。武蔵の単弁系の軒瓦瓦に対する重弧文系軒平瓦の存在は、武蔵の瓦当文系譜の成立の礎に山田式があったとみられよう。すでに述べたように、奈良前期、東国では、山田寺式瓦当文の定着が多いのが特色であり、日吉庵寺(静岡)竜角寺(千葉)などその代表的なものとしてあげられる。

武蔵国分寺の瓦当文系譜の成立の礎に山田式があったことを強調されている。

瓦の比較と関連性 その(三)

瓦の比較とその関連性その(一)で述べた様に、法輪寺と山田寺=武蔵国分寺瓦の類似性については、すでに述べた通りであり、東関東の蘇我氏と聖徳太子の関りあいでも解る様に多賀城や、武蔵国分寺や山田寺式や、法輪寺式系譜の瓦をみることは、先に述べたことから、うなづけるであろう。

さらにここで、四天王寺や、法輪寺(若草伽藍同範瓦と武蔵国分寺の類似瓦にふれておこう。

一、四天王寺瓦と法輪寺(若草伽藍同範瓦と法輪寺) 武蔵国分寺瓦 (写真A1:A2:C1:C5)

四天王寺境内から出土する七世紀前半の軒丸瓦のほとんどは、八弁であり他に九弁や十弁の軒丸瓦も見られるもので、それ等はほんの数点に過ぎない。したがって四天王寺の造営計画が突発的に建てられた為、瓦当範を同じ法輪寺のものを調達使用したものと考えられる。同じ様な例には、中宮寺と、平隆寺の創建時の瓦の両寺とも全く同範の使用の例と云える。

瓦の比較と関連性 その(四) 写真E1~E2:F1~F3

F3:G1~G3:H1~H4) 神奈川の主な古瓦についての類似性

県下では海老名国分寺、千代廃寺、影向寺(川崎)宗元寺(横須賀)などが上げられる。

この中で系譜を引くものに千代廃寺の飛雲文軒平瓦(G-1)と横須賀宗元寺の飛雲文軒平瓦(G-2)は同様な図文又は同範である。又横須賀市公郷瓦窯跡(G-1)の出土のものが同範である。

これとは別に八葉変則単弁蓮花文鑑瓦千代廃寺出土と平塚下之郷及び横須賀宗元寺のものが範ずれもあり同範である。(H1~H2)

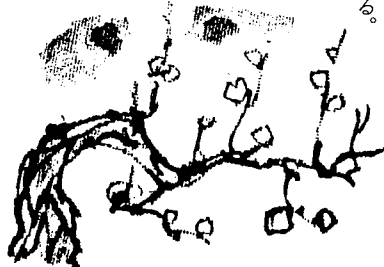
さらに宗元寺出土に忍冬蓮花文鑑瓦(E-2)がありこの忍冬文を配したものは全国的にみても、図文に特色がありその古刹の数も限られている。宗元寺の忍冬文と同範の図文即ち忍冬文と蓮花文を十字型に交差した形は飛鳥時代末期の奈良、西安寺(E-1)にはじまり、横須賀の宗元寺に伝播したものと思われる。写真(E1~E2)その他の忍冬文では中宮寺のものがあ。写真(F1~F3)

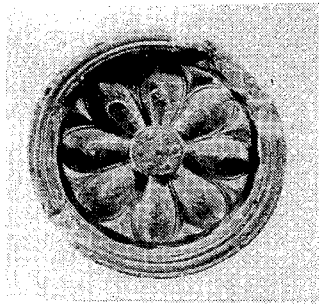
六葉蓮花文の花弁の中に忍冬文を配した鑑瓦と均正忍冬唐草文軒瓦の組合せである。後者は中宮寺からも出土し、軒瓦の顎面には、瓦当面の唐草文をへら描きで表わしている。これと同文の瓦は法輪寺東院の下層からも出土するので皇極二年(六四二)蘇我入鹿らの焼打以前と考えられる。さらに法輪寺の前進若草伽藍からも出土している。中宮寺は奈良時代建立の七寺の中に数えられている。瓦の形式からみると法輪寺、豊浦寺よりも遅れているとみられている。法輪寺に続き當代では大阪野中寺他、滋賀志那中、愛知・元興寺社、岐阜・古川、広島・横見寺址、山口・周防国府にも一例づつ知られている。

川崎影向寺の山田寺式はすでに述べた様に、多賀城や関東で多くみられ、静岡の日吉庵寺・をはじめ千葉に多く伝播しており、下総(千葉)竜角寺(写真D-4)竜尾寺、長熊庵寺、木下庵寺、があり上総では、法興寺、余富庵寺などにみられる。さてここで相模の国分寺と云われる海老名の国分寺瓦であるが、ここから出土する瓦については余り系譜

だった傾向が見られないのである。強いて云えば鬼瓦に於て千代や、武蔵のもの模した傾向がみられるが幼稚さが否定出来ない。髪(髪)の巻毛、門歯、牙、鼻の横しわ、眼球の形等にそれ等が窺えるこの様なことからしても明らかに千代廃寺の鬼瓦の模倣であり、寺そのものの建立自身、千代廃寺の後のものであることが鬼瓦から否定出来ない。強いて云えば鬼面に眼球を入れ込んでいるのが海老名の独自性のデザインである。鑑瓦の方で云えば尼寺跡出土の五葉素弁蓮花文鑑瓦であるが、海老名独特のデザインを持ったもので恐らく高句麗系のものであろう。前場先生も云っておられるが、下総国分寺鑑瓦の宝相萃文様がさらに退化したものであろうこれ等のことからしても海老名国分寺は時代的に古くは遡れるものではないことが解る。(海老名鬼瓦千代模倣については後の章とします)

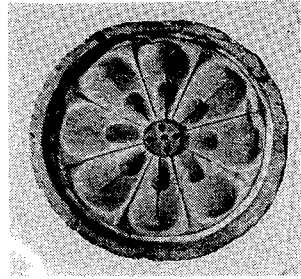
次に八葉蓮花文鑑瓦であるが、一見複弁に見えるが複弁にまがう単弁である。僧寺及び、尼寺に使用されたものと推定される。但し他と関連で同類が横須賀の宗源寺(完元寺と並ぶ小字宗源寺)から出土していることは、大変興味深いものがある。この宗元寺は、地元の赤星直忠氏の発掘調査の結果、法輪寺式伽藍配置であったと云われている。最後に松田瓦窯跡出土の十葉蓮花文鑑瓦であるが、同範のものが千代廃寺より出土している。ところがこの瓦の裏側の作りには特色があつて、裏側の縁の部分に窪みをつけているのである。千代廃出土のものもまったく同一の手法により造られていることからすると、同系又は、同じ作瓦師による作と考えられる。(写真H3~H4)千代のものとは他の蓮花文鑑瓦についても同様の手法のものがみられるのである。これ等は瓦師の作瓦の特色をよく現わしているもので、このことからすると松田瓦窯は、千代廃寺の瓦を焼いた瓦として、ほぼ間違いないものと云える。





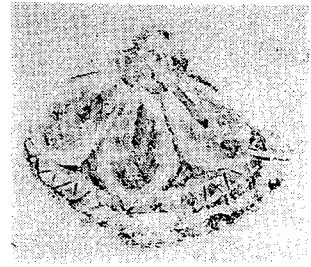
山田寺

D-1



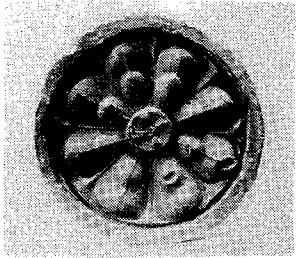
多賀城廢寺

D-2



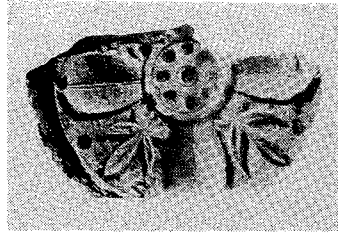
影向寺(川崎)

D-3



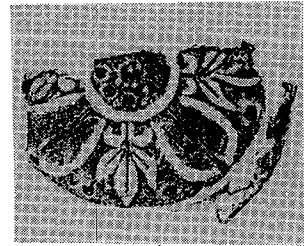
竜角寺(千葉)

D-4



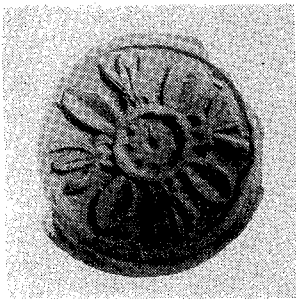
西安寺

E-1



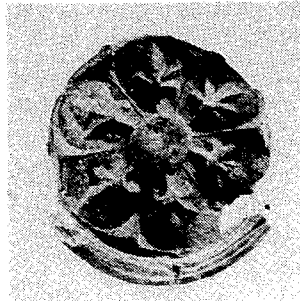
宗元寺(横須賀)

E-2



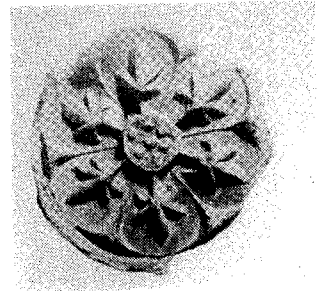
宗元寺(横須賀)

F-1



中宮寺

F-2



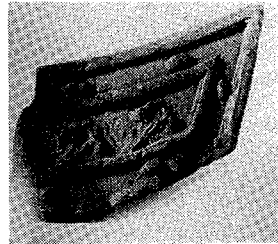
若草伽藍(法隆寺)

F-3



公郷窯跡(横須賀)

G-1



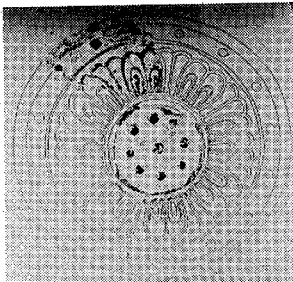
宗元寺(横須賀)

G-2



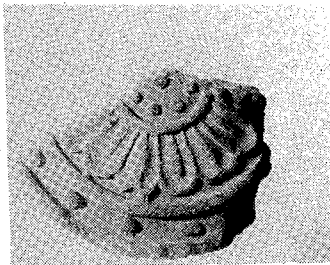
千代廢寺

G-3



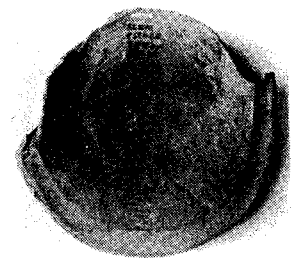
下寺尾(茅ヶ崎)

H-1



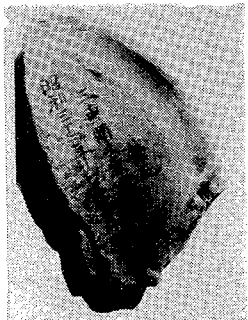
宗元寺(横須賀)

H-2



松田瓦窯跡

H-3



千代廢寺

H-4



四之宮廢寺(平塚)

H-5

# 樋口彌門のこと

## 大稻荷神社の御手洗から

岡部 忠 夫

### 珍らしい御手洗

小田原市城山一丁目の大稲荷神社にちよつと変つた御手洗が残っている。

現在は使われず、社務所のとつづきの階段の右手に置かれたままで、下辺は土で覆われている。

上辺の高さは、ヨコ七三、タテ三九・五と、やや小ぶりだけで、その形は普通、社や寺に見受けられるものだが、ちよつと変つているというのは、

と、正面中央に彫れた文字だ。私の知る限りでは、西相模地方や、静岡県の小田原藩領では、その例を見ない。諸橋轅次さんの『大漢和辞典』で調べると「クワンパン」手を洗うに用いる器」とある。

この文字の左(向つて右)には 奉寄進  
右には 寶永二年  
乙 酉五月廿三日

と、さらに、その下には、

五人の寄進者の氏名が彫られている。

『新編相模風土記稿』によると、大久保加賀守忠増が小田原城主のときの、宝永二年(一七〇五)二月、藩

士清水清左衛門の妹が、谷津村の東の田圃の中にあつた田中稲荷より「本年中に城主に吉事がある」というお告を受けた。すると、そのお告にたがわず、忠増はその年の十二月に老職に補された(忠増が老中になったのは九月で、十二月には侍徒の称が与えられた)『徳川

実紀』忠増は、その神威の大きさに、この稲荷を深く信奉するようになり、翌三年五月社を現在地の山上に遷し、大の字を冠して大稲荷社と唱えるようになったと記している。

すると、この御手洗が寄進されたのは、社が、まだ田圃の中にある頃で、清左衛門の妹が神がかって、城主の吉慶を告げて三ヵ月後のことになる。

この辺の事情を推察すれば、お稲荷さんのお告げ、つまり彼女の予言は、城主の吉慶だけでなく、一般の人々にも及び、世上評判となり、大いにもはやされ、田中稲荷詣をする人が多かつたのではないかとも思われる。その御利益を期待しての御手洗の寄進ということに解釈ができないこともない。

寄進者に樋口弥門がその寄進者の名前を挙げると

青木求之祐  
樋口 弥門  
稲垣政右衛門  
辻満 口太夫  
佐藤 三之照

このうち二番目に名を連ねる樋口弥門については、江戸市井の出来事を記録した『武功年表』は、次のように記している。

宝永五年戊子五月  
十文銭始めて通用始まる(表に宝永通宝、裏の輪に永久世用とあり。径一寸二分、重さ一匁、文字は、

小田原侯の臣にて林祭酒の門人樋口弥門が書なり)。

この『武功年表』からすると、弥門は、藩から選ばれ、聖堂、昌平黄などと呼ばれた江戸幕府に学んだ秀才ではないかと受けとれる彼の師、祭酒は、大学頭(だいがくごう)の異名で、林家は歴代聖堂の塾長を勤めているからである。

弥門は書家としても有名であつた訳で、彼が御手洗の寄進者として名を連ねているからには、その御手洗の文字も、彼の書を元にして彫られているに違いない。

と言う訳で、大藏省編算の『大日本貨幣史』を調べてみた。ところが、宝永通宝の記録は載つていても、図ないし、写真は、掲げられていないので、貨幣と御手洗の筆跡の対照が出来ない。

しかし、御手洗の文字も、宝永通宝の弥門の書によるものとみても誤りないと思ふ。

それも、寄進者は、その所在からして小田原ゆかりの人達のように考えられるし、当時、正式に姓を名乗ることが出来たのは、一般的に武士階級などごく限られた一部の人であり、また、盤盥という文字は、相当漢字の教養がないと使えないと思われるからである。

弥門の人物像と  
『古餘綾見聞志』

その御手洗の書体は引き締つており、それから、彼の人間像を、  
瘦身で、緻密な頭脳を

持ち、挙措動作の謹厳な学究肌のタイプと連想してみたが、実際には、そのような類型的な粹におさまるような人物ではなかつたのである。

腹が坐つたと言ふか、臍を決めて居直つたと言ふか人並みはずれた彼の逸話が『古餘綾見聞志』に載つている。このことは、会長の

中野敬次郎先生のご教示により知り得たもので、改めて、自分の不明さを覚える次第でもある。

『古餘綾見聞志』の原本は、中野先生が所蔵されておられ、その成立年代は明らかでないが、小田原藩士の逸事が記されており、先年先生の解題・校正により騰写印刷で発行されている。著者も不明であるが、中野先生は「恐らく小田原藩関係者で、武芸に秀で、しかも文筆の嗜みがある者と想像される。しかし、文武両道を兼備する人物は、それほど多くないので、『相中稗志』の著者、三浦義方ではないかと言ふ見解もあるが、現在のところ、はっきりしておらず、今後の考定を期したい」と言われる。

樋口弥門の逸話  
それでは、中野先生が、解題・校正されたものによつて、樋口弥門の逸話の概要を、現代文で記そう。

(樋口雪江の能筆)  
樋口弥門は、儒者であり雪江と号し、とても字を書くことがうまう、大老の柳沢吉保の依頼で十文銭の名字を「宝永通宝」「永久世用」としたためた(もつとも、この貨幣は人気がなかつたと思えて、永久世用とは裏腹に、通か八ヶ月後の宝永六年一月、通用が停止されている。)

筆者註)その謝礼として黄金一枚を貰ひ、誠に古今まれな能筆家として、その名は知られ、人々は畏敬の念をもつてむかえたのである。

ところが、雪江は、なりふりを構わないところから、かえつて人々の笑いの種になつたが、あるとき、聖堂で左一番の上席に座つたので、これを見た人々は大いに驚いた。そこで將軍綱吉が臨席、雪江を召し出して正面の額を書くように命じた。すると、彼は、有難きしあわせと、謹んで認めたのであつた。この状景を見た人々々は、感心して、のちのち迄も語り草にした、と言ふ。

(雪江白扇百本に染筆)  
雪江は、芝神明前町の扇屋で、ときどき扇を買い求めていたが、ある日のこと、白扇百本余りを取り寄せ、気の赴くままに書いたうえで、扇屋の主人を呼び寄せ

「これはよくないから

返す」と申渡した。主人は大いに驚いて「このよう無駄書きされては、売物になりませんから、買い取ってください」と言ふと、雪江は、それに答えて「もと銭にはなるだろうから、とりあえず、何処かえ持参してみろ」というので、主人は任方なく渋々立ち戻り、すぐさま増上寺に持って行き僧侶にみせたのである。

すると、ある僧がここに顔で、一本いくらかと値段を尋ねた。「一本鐙銭三百文で差上げます」という扇屋の話に、その僧侶は大に喜び全部買上げ、そのうえ、手許に残っているならば、一本銅銭二百文で全部買うから、という注文に、扇屋は「いとも、ご安いで」と、早速、扇子を樋口の家に持ち込み頼みこんだ。

すると、雪江は、「今手が震えてできない」と答へるので、扇屋は折り入って頼みこむと、「ならん」と叱りつけたので、扇屋は、取りつくしまもなく、ほうほうの態で帰ったと言ふ。

(雪江、金成与九郎、吉原に遊興)  
日頃、雪江は、金成与九郎とは心安い間柄で、あるとき、吉原に遊びに出かけ二、三日泊り続けた。与九郎は帰ろうとしたが、雪江

は悠々として帰る気配はさらさらなかった。さらに逗留が五日に及んで、与九郎は、帰ろうとしたとき、屋敷より尋ねてきたので、大いに喜んで(どのような意味なのであろうか。金が届いた意味なのか?)また、四・五日遊興を続けた。しかし、金は一文もなく、流石の与九郎も顔色を失い、どうしたらよいか、あと始末に困り果てたが、雪江はゆったり落ちついて酒宴を開いたのである。そして、しばらくしてから、唐紙を求め、硯箱を取寄せ、筆を打しめ大文字を認めた。これを浅草の門跡に使を出して届け、十五両をととのえ、支払をして帰ったのである。

ところが、与九郎は、これを切つ掛けに身を持ち崩し、酒色に耽けるようになってしまった。これを聞いた雪江は気の毒に思い、信の一字を認め、与九郎に贈ったところ、母親は大いに喜んで、表装して軸に仕立てた。

与九郎はそれからというもの、は、気持を入れかえ名を弥兵衛と改めて、父の残した教えを学びとるようになり、立ち直ったと言ふ。

以上の弥門の逸話には、ときに、奇矯とも思われる行動がある。見方によって

は、弥門の才能が、当時、身分制度のかつちりした社会の枠組の中で、変容した形で発現したと受けとめられないこともないが、それ

### 筑波山と尊徳遺跡めぐりと

#### 科学万博見学の会に参加して

富田千春

(一)筆をとる

六月三十日、七月一日の一泊二日の史跡めぐりの会に参加させて貰った。史跡めぐりは小田原史談会の三本柱の一つ、なるべく参加したいとは考えていたが、先年東北の史跡めぐりの時は、八時前に行ったのに受付けて貰えなかった苦い経験もあり、日曜日は色々の行事と重なったりで、この所ずっと参加していなかったが、今回は久しぶりの参加である。

筑波のホテルで、偶々杉崎さんと同室となり「最近会報の原稿が乏しくて苦勞する」との話をきいた。この会に気軽に参加してメモも全然とっていなかったが帰ってから記憶を辿り乍ら筆をとることにした。  
(二)バスの中にて  
台風六号の接近で、出発

は、現代からの視点であつて、そこには、彼が何か一つ貫いた、強い背骨があるような感じがしてならない

今朝から一日中雨だった。車窓からの景色は霞んでいるが、参加者三十名を割って席は一人でゆったり寛ぐ。バス旅行では、歌謡曲を次から次と歌つたりマイクが廻つて来たり気まづい思いが、史談会では全然なく助かる。

茨城県に入ってから「尊徳記念館を改築へ」という神静民報六月の小田原市計画の記事をコピーして準備し、長谷川さんが読み上げて呉れた。承平、天慶の「平将門の乱」についての資料を抜粋し、関係地図を添えてコピーしたのを、下川さんが丁寧の説明して呉れた。数年前、連続テレビ物で「平の将門」をやり、領土の奪い合い、一族、農民の奮戦等はこの辺だったのかと、在りし日を思い起し乍ら、雨に煙る関東平野を車窓か

ら眺めた。

(三)昼食は

結城紬センターで東北自動車道を佐野藤岡I・Cから結城市に向う。結城市というと結城紬が頭に浮かぶ。センター店内に生糸を紡ぐ所、居座り機で結城紬を織るのを見せて呉れる。繭から生糸を製造する機械製糸は良く見るが、農家の家内職の様に、真綿を唾をつけながら引き出し、撚らずに細い糸を造つて行く様子は始めて見た。一反を作るのに何ヶ月もかかるという気が遠くなる様な工程だ。この辺ではまだ蚕養をやっているのか、干瓢畑に混じって、春蚕の終つた桑畑が大分見える。

(四)下野薬師寺跡  
結城市から十キロ程の所に下野薬師寺跡がある。弓削道鏡が太政大臣禪師までなった聖職を奪われ、下野薬師寺別当職として謫された所。今から一二五年前である。住みなれた奈良の都をあとにはるばる東海の駅路を経、箱根の難所を越え、千代の里に至ると、孝謙天皇から賜った、笈佛の観音念持佛が、にわかにも重くなり進まず、村の老若男女渴仰して手に手に青竹を運び草堂を営み当村に安ぜりと云はれた。千代には非常にゆかりの深い、弓削道

鏡、下野薬師寺である。下野薬師寺は日本三戒壇の一つといわれた所で、東国では昔から栄えた所、日光開山勝道上人も、五年前ここで修練されたという。

下野薬師寺別院龍興寺の本堂で任職から色々の話を聞く。境内に、伝道鏡塚という上下方墳丘の前に、古い大きい五輪塔がある。道鏡は左遷二年後、七二二年四月七日、都を遠く離れたこの霊場で不遇な生涯を閉じたと立札に書かれていた。

(五)桜町陣屋跡

領主大久保忠真公に拔擢され、宇津家の復興仕法実施を命ぜられ、その翌年三月十二日住宅家具一切を六両一分で売払い、波子夫人嫡男弥太郎を同伴して、再び郷土に還らじの悲愴な決意で桜町陣屋に出発したが、二宮尊徳三十七才の時、それから二十二年間この陣屋に住んで、桜町の復興に心血を注いだ所である。



お札、絵はきが置いてある。隣りに桜町二宮神社がある。

茄子の味から凶作を予知し桜町を飢餓から救ったという話、桜町仕法に、代官その他の妨害があつて、成田山に参籠、二十一日間の断食祈願したこと等々、苦闘の姿が懐かしく思い出される。急流の上に、カヤ葺きの小屋を作らせ切りおとし、数分間で急流を堰き止めて、見守る万人をアツといわせたという、青木村桜川へ切用水高堰もこの近くだろうか。

三宮堰、八本堰や、二宮尊徳ゆかりの蓮城院の見学は降りしきる雨の為、惜しくも割愛されたが、このあたり一帯の水田は早植えなのか、もう田圃全面青々として生育が良い。百数十年前の二宮先生の労苦の息吹を感じた。

(六) 筑波神社から宿へ 二宮先生が大活躍の地の事で、昭和二十九年三村併合し、ゆかりの町名をつけたという二宮町を後に、バスは筑波山に登る。雨で眺望はきかないので、筑波神社だけ参拝し中腹の筑波温泉ホテルに入る。台風六号は沼津に上陸、関東地方直撃との事だが、ここは大した事もない。ここは山の中で田圃は遠いはずだが、

さすが筑波山である。蛙が近くで夜通し良く鳴いた。蛙が七月一日、夜が明けると台風一過、昨日の雨はうその様にすっかり晴れ渡る。関東平野の彼方に連山が見える。あれは富士山かなあと話し合っていたら、ホテルの支配人が「今朝は富士がくっきり見える」との放送でやはり富士山だった。ここからも富士山が見える。

桜町二宮神社の境内に、尊徳の名句「不二は申さず、まつむらさきの筑波山」の石碑がある。中野先生が「富士は申さず」の意味が色々と考えられるとの説明があつたが、二宮先生幼い頃の、毎日見て育った栢山の富士山を、桜町での苦難、失意の時、古郷の事とも思い起しながら、どんな気持ちでこの富士を眺めたか、しみじみ考えさせられた。

(七) 科学万博へ 八時半、ホテル出発、筑波山の全貌がすつきり浮ぶ。九時十分会場へ着く。台風の影響で今日の入場者は少ないかと思つたが、バス、車が連つて中々の人出で賑かである。三時半西ゲート集合で自由見学。私は前評判の富士通パピリオンの整理券の列へ急ぐ。何百mの長い列はどんどん伸びる。強烈な夏の日射しが前から照りつけて暑い。でも外は

暑い館内は冷房がきいていて何処も涼しかった。一日では中々困難と聞いていたが、くるま館、鋼鉄館、歴史館、外国館等々と夫々時間一ぱい堪能し楽しんでた。

役員は迷子を心配したが、全員無事帰路のバスに乗り込む。都心部は一寸混んだが、予定通りの時間で夕暮時の東名を西に急ぐ。今日は山開きのはずの富士山が、美しく夕空に見える。

### 大師号について続き 米神 青玉山正壽院

福 守智 快

浄土宗の「法然上人」は円光大師の他東漸大師。恵成大師。弘覚大師。明照大師と大師号を五つも送られております。にもかかわらず「大師たま」と言えば、弘法大師を指すのが普通です。お大師さまの偉大さを示すものです。

### 訂正

会報一三三号に誤字の多かつた事を御詫び致します。左の様に訂正願います。

頁数	段数	行数	誤	正
二頁	一段	三行	六部甲水	六部用水
三頁	一段	四行	ガードが	ガード
三頁	一段	四行	前長	全長
三頁	六段	十九	練笠	練習
三頁	四段	二〇	行なわれた	た削除
三頁	寫眞	上	東海道線は	は削除
四	一	二六	坂口下	坂下口
四	三	十五	芹子橋	芦子橋
四	三	二四	穴部用水として	削除
四	三	二四	スタートした	
● 諸白小路について				
四頁	四段	九行	鍋 小路	鍋鉦小路
四	五	四	江戸家	江川家

- 四 五 六 江戸家
- 四 五 三〇 寄法
- 四 六 三三 宗奇
- 我が郷土の我が家の年中行事
- 五 頁 三段 二七行二八行の間へ、二六天長飾入る
- 五 三 二八 誕生日
- 五 五 三九 破魔引
- 六 五 一三 近隣所
- 千代庵寺古瓦は語る
- 七 頁 一段 五行 その午
- 七 一 七
- 七 一 八 一番上の
- 七 二 十 便
- 七 三 三 連弁の非常
- 七 三 三 C-1
- 七 四 三 二二 ● C1
- 七 四 四 一 二二 六二二
- 七 四 十一 箔
- 七 六 二九 が賜った国造て
- 八 二 三三 寺を
- 八 四 二二 三三 こうちて
- 八 四 二二 南部
- 写真
- 六 頁 二段 中 B5
- 六 三 右 法隆寺
- 六 三 中 飛鳥寺C-1
- 六 四 左 法隆寺C-3
- 六 四 左 飛鳥寺C-1
- 大師号について
- 八 頁 中途で終つたことをお、びします。
- 青玉山

### 日本の姓 順位

#### 米神 渡辺弥太郎

- ① 鈴木 約二百万人
- ② 佐藤 約百九十万
- ③ 田中 約百六十万
- ④ 山本 約百二十万人
- ⑤ 渡辺 約八十五万人
- ⑥ 高橋
- ⑦ 小林
- ⑧ 中村
- ⑨ 伊藤
- ⑩ 斎藤
- ⑪ 加藤
- ⑫ 山田
- ⑬ 吉田
- ⑭ 佐々木
- ⑮ 井上
- ⑯ 三堀
- ⑰ 巻島